

笑つては欲しいけれど

河合 聰子

初めて会った十カ月位の赤ちゃんに笑いかけられたときは、とろけそうな笑顔に会えた喜びよりもどうして笑っているの！と驚きの方が大きかったのです。首をかしげてにいーっと笑いかけてくれたの

年前まで、よほど親しい人にしか笑顔を見せませんでした。

生後五カ月から入園前まで、次女は大学の実習時間にもなつていた保育グループに参加していました。母親から離れる子はお姉さん（学生さん）やお友達と遊び、一緒にいたい子は親子で遊びます。お姉さんは、一緒に遊べるよう一生懸命かかわりを持とうとしてくださるのですが、次女は表情も体もラゲラよく笑つてはいましたが……）特に次女は半

堅くして私にぴったりくつつくのが常でした。名前を呼ばれても返事をせず、相手を睨むようなこともありました。中にはお姉さんの誘いににこにこ応じて遊びはじめるお子さんもあるのですから、次女に對して可愛くない子とまでは思わないものの、戸惑いは感じたのではないでしようか。

初めて会う小さな子とは、とりあえず、目を合わせずお母さんと話をするようにしているのですが、先日、次女の幼稚園のお迎えで門の前で待っている時、一歳半の女の子が不機嫌な顔をしているのに親しみを覚えて、つい話しかけて、更にその子の表情を疊らせてしまいました。そのお母様は、たまに会うおじいちゃんおばあちゃんの顔を見ると泣いてしまうので、可愛くないねーと、嫌みを言われる、と苦笑いしながらおっしゃっていました。

この一歳半の女の子も、我が娘も、單に人見知りをする子ども、と括れるだけのことかもしれませんのが、可愛くないというような評価には、納得できな

いものがあります。笑いかける行為には、笑いが戻つてくる、という期待が込められ、その通りにならないと裏切られた思いになるのではないでしょか。それで可愛くないと言うなんて失礼な話です。笑って欲しいと願うのは当然の気持ちとしても、笑うかどうかは赤ちゃん本人の問題ですから。

もう一つ、笑いかける人の規線は、時によつて遠慮のない行為だとも言えます。長女が九ヶ月の時に義父は亡くなつたのですが、電車の中でも人見知りのために泣いてしまう長女が義父に抱っこされて泣いたことはありませんでした。病室に入つていくと、義父はあやす声は出しても長女の目を見ることはしませんでした。そしてまずは、長女が私の方を見たままの格好でひざにのせてくれていました。

幼稚園での教育実習で、朝の受け入れをする、と決められた日以外は、子どもに背を向けて迎えるよう指導を受け、すでに整つているおもちゃをそろえるふりをしながら、登園時を過ごしていたことも

特集〈笑う〉

思い出されます。

次女にとつても、さあ遊びましょ、といわれることは、あまりにストレートな関りであつたため脅威となつていたのではないでしようか。

笑うかどうかは、赤ちゃん自身の問題といいながら、笑いを求めていた自分にも気づきます。アトピーの痒みのためにぐつすり眠れないために、寝起きが悪かつた次女に、にこにこ起きてくれればいいのに、と思つたものでした。機嫌が悪いことにいらだつこともありました。痒みのストレスを考えれば十分に不機嫌でいるのが当然ですし、暫くすれば自分で立ち直ると思えるようになりました。そして二十数年前のことを思い出しました。私が小学校五年生の時、毎朝泣いて起きてくる六歳年下の従姉妹をなだめながら、泣いてはダメと言い聞かせると、翌朝から泣かずに起きてくるようになつたのです。この時は、泣かなくなつたことを、自分の手柄のよう

ばよかつた、と今さらながら思つています。

幼い子を前にして、笑つて欲しい、という気持ちはとても自然です。誰に対してもにこやかにできれば横にいる親も嬉しい気持ちになります。でもいつも笑顔を求められることは、子どもにとつてもつらいことになります。笑うことを求めることでその子らしさを見落としてしまうこともあります。そのままの娘を受け入れていこうと思つていたはずなのに、自動的に、笑うことを探んでいたことに気づくと、泣いていても怒つっていてもいい、となり、一緒にいるのが楽しくなりました。

いつの日か、初対面でもにこやかに微笑める次女の姿を夢見ながら、実際にはむくれ顔をすることが多い娘を、にこにこと見守つていきたいと思つています。